『一読三歎 当世書生気質』の見せ方見え方
初版と再版とテクスト受容について

文化創造研究科国文学領域
一四〇〇二ＣＪＭ　鈴　木　裕　人

修士論文要旨

明治一八年六月から翌年一月にかけて刊行された、坪内逍遙『一読三歎 当世書生気質』（以下『書生気質』と記す）の書物テクスト面の考察を目論んだ。「パラテクスト」（ジェラール・ジュネット）を意識しつつ、書物としての『書生気質』に触れた。

〝はじめに〟では、文学作品の伝播・受容を考えるうえで外すことのできない文庫本の特徴を明らかにした。文庫本は「読ませる機械」（紅野謙介）として特化する一方で、テクストの持つ書物としての面を希薄にする。また、作品解釈に影響する様々な要素を意識化する必要がある。

〝一〟では、初版本『書生気質』の出版形式に注目し、逍遙の同時期の作品である『小説神髄』との共通性を意図した造本がなされたことを指摘した。出版前史へ目を向けることで、半紙本の判型と分冊形式とが、当初『書生気質』『小説神髄』の出版を予定していた東京稗史出版社の出版規格から離れた、独自の造本であったことが明らかとなる。

〝二〟では、内田魯庵の、『書生気質』が読まれたのは作品の完成度ではなく「文学士の肩書」のためである、という指摘を元に、著者が「文学士」であることが、いかにして知られるようになったのかを考察した。「一読三歎 当世書生気質はしがき」やその後の評価によって、作者が『書生気質』を『小説神髄』の関連作品としてとらえていたことが今日では自明と化している。しかし『書生気質』出版当時は『小説神髄』ではなく、新聞というテクストによって読みの方向が決定された。『書生気質』「第一号」出版直後『読売新聞』には、『書生気質』の著者が「文学士」であるという記事が掲載される。この記事によって著者が「文学士」であると明らかになり、作中人物の材料への興味が掻きたてられることになった。

〝おわりに〟では、『書生気質』の文学史上の位置づけの形成を概観し、「文学士」としての解釈が相対化される様を追った。「文学士」として見る解釈が定本化によって失われたことと、文学史の成立に言及した。